

ずいそう

奇跡の森と真言密教

山口文章



1. はじめに

SDGs (Sustainable Development Goals) という言葉もすっかり社会になじんできた。

しかし今もしっくりしない感がある。そもそも「Development = 開発」「Goals = 目標」とは何なのか？ もちろん「開発」とは自然開発だけでなく、人類の生活を安全で便利で豊かなものにする活動すべてを意味することは明白であり、数値的な「目標」がなければ開発の方向性と規模、スピードをコントロールできないことはよく理解できる。

それでも私は思うのである。何かを目標にして開発をすること自体、「Sustainable = 持続可能」と矛盾するのではないか？ この発想の源泉は高野山に現存する巨大杉の森林にある。

2. 現在の日本林業

言うまでもなく、林業は日本を代表する伝統的な一次産業のひとつである。しかし、森林に関係した職業が「生業 (なりわい)」でなくなってしまって久しい感がある。つまり、残念なことに現在の日本林業の多くは経済性を失ってしまっているのである。

その理由は多く考えられる。伝統的な木造住宅が鉄筋コンクリートを中心とした近代的な建築方式に激変したことや、世界的な流通の発達から東南アジアを中心とした安価な輸入木材が国産木材の需要を壊滅的に圧迫したことなどがよく指摘されている。

しかし、高野山に現存する巨大杉の森林は現在も経済性を失っていない。樹齢500年を超す巨大杉は樹高60mに達し、胸高直径は2mを遙かに上回る。優良な品質の巨木杉が1本3千万円で売買されることも珍しくない。この違いはどこから生じているのだろうか？

その答えは比較的容易に導くことができる。それは、林業に対する概念と理論および、施業方法と目的にある。

3. 林業に対する概念と理論

日本林業の根底に流れる理論はドイツ式「造林学」である。私は京都府立大学農学部林学科、同大学院農学研究科林学専攻を通して9年間にわたり造林学を学んだ。それまでに感じていた林業の根底に、かくも統計学に裏打ちされた緻密な学問があることに愕然とした。以来、造林学だけでなく、森林生態学、森林植物学、砂防工学、林業統計学などを貪るように学んだ。

林業と他の一次産業の大きな相違点は、生産物の収穫期の長さである。100kg級のクロマグロを稚魚から養殖するのに5年、真珠の養殖は長くて2年、ほとんどの農作物は単年度の収穫が可能である。しかし、日本の林業は伐期を50年とした。これは、前述のドイツ式「造林学」の根底に古くから流れる「法正林理論」による。法正林とは、林業対象とする森林を区画し、毎年、区画ごとに同一施業を行うというものである。簡単にいうと、ひとつの区画ごとに皆伐を行い、その後植林を行う。全ての区画の皆伐再造林を終えると、最初の区画に植樹した森林が成林しているというのが法正林理論である。

つまり、自分が所有する山林を50等分し、その区画ごとに皆伐再造林を行う。すべての山林を一巡すると、はじめの区画には50年生の林が生育しているので二巡目の施業を行う。毎年、皆伐による収入を得ながら永久に続けることができる。これぞ理想的なSDGsにほかならない。さらに、50年という収穫期は、針葉樹が建材の価値を有する最短期間であるという効率最優先の希薄な理論により裏付けられたものである。

しかし、すでに1800年代に唱えられていたSDGsの先駆けともいえる法正林理論は現実のものとはならなかった。理由は、森林の培地が急峻な山地や平原など多様であるため、農業のように生長量が画一ではなく、平準化できないことが最大の要因である。とくに、ドイツと違って急峻な山脈に覆われた日本では成立するはずのない亡霊のような理論であった。

戦後、高度経済成長期の日本はこの亡霊に取り憑かれた。一斉皆伐一斉造林が生み出す効率の良さと事業費の圧縮。植林後、一区画ごとに同一施業を行う高度

な計画性。一番の魅力は「Sustainable = 持続可能」であったことは疑う余地がない。その結果、所有している森林の土壌や気象環境などを無視して亡霊を追い続けた日本の林業は衰退の一途をたどることとなった。さらに、間違いに気がついてやり直すことができない長い収穫期がとどめを刺した。

4. 奇跡の森の施業方法と目的

高野山には他に例を見ない巨大杉の美林がある。それらは300年以上前に植えられたものがほとんどで、なかには樹齢750年を数える巨木も珍しくない。日本各地から見学に来た多くの林業家や森林生態学者は口を揃えて「奇跡的」と言う。奇跡というのは、ドイツの造林学をアレンジした日本林業の常識を無視して成立していることに起因する。つまり、日本の造林施業の中心は「密度管理」にある。農業と同じく、間引くことにより太陽光や土壌の養分、水分を効率よく植物に分配することである。しかし、高野山には理論上あり得ない密度と樹齢の巨木が林立する。この巨木林を「奇跡的」と評価する私たち現代社会の林業家にとって、その奇跡の森が成立した答えを導くのは容易ではない。

以前、東北地方の山奥で「坪植え」という伝統的な造林方法を見たことがある。天然性林の隙間にできた比較的小さな面積に同一樹種を密植する。密植された木は周辺の高木に守られて育まれる。決して太陽光や養分は多くはないが、自然環境の恵みは合理的に分配され、強い林分に成長する。間伐は極力避け、自然淘汰によって生み出された密度管理に重点を置く。収穫期は条件により様々であり、一定しない。坪植えという施業方法が造林学の教科書には存在しないのは、効率の悪さと生産性の低さにあることが推察される。しかし、高野山にある奇跡の森林は広大な面積の坪植え

に近い。それは人工林でありながら、自然開発とはほど遠い、むしろ、大自然の恩恵を最大の原動力としたものと言える。

さらに、高野山に現存する巨木林が成立した最大の要因は、その目的にある。数百年前に高野山に杉を植えたとき、その目的は「信仰」であり「経済」ではなかったのである。高野山に残る造林記録の初出は長和年間(1012~1017)、祈親上人定誉が行った檜の植林である。祈親上人定誉は、落雷による火災の頻発や高僧の相次ぐ遷化により疲弊していた高野山を復興させた中興の祖としてよく知られている。以来、高野山上の林業の目的は「森厳護持」を大道とするようになった。これは、信仰環境の保全を第一とし、金剛峯寺による厳しい森林政策とともに連綿と今に伝えられている。

5. おわりに

以前「千年の森を作る」と紹介されたことがあるが適切ではないと思った。高野山上には樹齢千年を超える森林は存在しないので、目標とするならば良いかもしれない。しかし、私たちは伐期を設定したことはない。さらに、仮に千年の森が成立したとき、それが高野山という土地で大自然の摂理にかなっているかどうかは誰にもわからないのである。

高野山に現存する巨木林は、林業におけるSDGsの理想的な形かもしれない。しかし、そこにある「Goals = 目標」は収穫期や効率性や経済性ではない。「奇跡の森」が奇跡ではなく、当たり前のように存在するようになったとき、SDGsは日本林業にその理想を実現することになるだろう。そのとき、そこには「Development = 開発」「Goals = 目標」という概念は、なじみが薄い存在になっていることを信じて疑わない。

——やまぐち ぶんしょう 総本山金剛峯寺執行山林部長・高野山真言宗総長公室長・高野山霊宝館長——